

# 学級集団のソシオメトリック構造を解き明かす CLASS

藤 本 学

## 要 約

学級集団のソシオメトリック構造を把握することは、教育現場や子ども自身に大きな恩恵をもたらす。集団のソシオメトリック構造を明らかにする方法のひとつにソシオメトリーがある。しかしながら、倫理的問題から、学級集団の人間関係を把握するための手段として利用することは難しいのが現状である。そのため、倫理的問題などで実施が困難になっているソシオメトリーに代わる新たな分析方法が必要となる。そこで研究 1 において、学級集団のソシオメトリック構造を明らかにする“CLASS”の開発を行った。つぎに研究 2 において関係性の親密さの評価基準について検証した。最後に研究 3 では、CLASS の活用例として、中学校 1 年生の学級集団のソシオメトリック構造の変動について検討した。本研究によって、CLASS は有用な分析方法であることが確認された。

キーワード：学級集団，ソシオメトリック構造，仲間集団，関係性の親密さ

## 学級集団のソシオメトリック構造

学級集団の状態は、ソシオメトリック構造、勢力構造、学級雰囲気、集団凝集性、スクール・モラル、学級規範などから把握することができる（瀧野，1997）。その中でもソシオメトリック構造は学級運営と深く関連している。松山・倉智（1969）は、望ましい学級運営とは、学級担任が学級集団への帰属意識を高めることで、相互協力により目標達成に向けて努力しあうように、子どもたちにはたらきかけていくことであるとしている。子ども間の良好な人間関係の形成は、学級運営の要諦であるといえよう。

学級集団のソシオメトリック構造は、日々の局所の変動とともに、長期にわたって大局的構造の変動と再構造化が行われる（楠見，1986）。これらの構造の変動は、子ども同士や子ども - 教師間の関係性を反映しており、学級に関する諸変数と深くかかわっている。田中（1970）によると、学級集団にまず 2・3 人規模の人間関係が出現し、それらの結合が水平的にひろがっていくが、やがてこの中から人気者や孤立児があらわ

れ、人間関係は垂直の分化を見せ始める。そして、友人選択や排斥が一部に集中する時期を過ぎると、平均化が起こり、学級集団は統合された構造へと発達していく。人気の集中化は集団凝集性と負の関連性を示すのに対し（Muldoon, 1955）、社会的受容が均一的に行われている集団は凝集性が高く、学級目標に関してポジティブな基準を持つ（Schmuck, 1971）。また、分散化構造の学級では教師の子どもへのはたらきかけも平均しているため、子どもは教師の配慮や指導を高く評価する（楠見，1986）。このように、人気が特定の子どものみに集中していない学級集団の方が、教師は効果的な学級運営を行うことができる。

また、男女で仲間集団の形成に違いが見られる。Karweit & Hansell（1983）によると、女子は親和的な関係を志向し緊密な友人関係を形成するため、少人数の仲間集団を形成しやすい。そのため、女子に対しては派閥的な性格を持つ仲間集団間の調整に気を配る必要がある。一方、男子は問題解決志向の友人関係を築くため、個々の結びつきがゆるい大規模な単一の

註 CLASS に関するサポートを次のサイトで行っています。http://www.psychcommu.net/

仲間集団を形成する傾向にある。よって、男子の仲間集団に対しては全体から外れた子どもへのケアが重要となる。

個人レベルでも、集団内での人気の高さを表すソシオメトリック・ステータスが持つ意味は大きい。たとえば、クラスメイトから肯定的な指名を受けた子どもは適応的な特性を持ち（田崎，1982；前田・片岡，1993）、逆に否定的な指名を受けた子どもは不適応的な特性を持つことが分かっている（前田，1995）。また、ソシオメトリック・ステータスの高い子どもは協力的行動やリーダーシップ行動などの特性との関連性を示し（Coie, Dodge, & Coppotelli, 1982）、積極性があり親和的な性格や行動特性を持つことが知られている（Bonney, 1943；Kuhlen & Lee, 1943；Young & Cooper, 1944）。ただし、学級集団に受け入れられることによって好ましい性格特性が形成されたり（長島・中野・田中・斉藤・中村，1955）、役割を与えられることでその役割に合った行動特性が形成されるなどの指摘もある（長島，1956；蘭，1981）。これらソシオメトリック・ステータスと個人特性は、循環的な関係にあると考えるのが妥当であろう。

以上のように、学級集団のソシオメトリック構造は学級運営や子どもに対する指導と深く関連している。したがって、学級を運営し子どもを指導していく上で、学級担任は学級集団内の個々の人間関係、およびそれらの複合体であるソシオメトリック構造を的確に把握しておかなければならない。教師は観察や直接対話を通して子どもの現状を理解している。子どもと直に接することで生きた情報を得ることができるが、日常的なはたらきかけの中で行われる経験的・直観的な子どもの理解には、主観性や偏り、限界などがある（小川，1956）。1クラスの人数が多いこともあり、学級集団内の子ども一人一人を的確に把握することは難しく、表面的な現れだけで子どもの人間関係の真相を理解することは不可能であるといつてよい。また、子ども同士や子ども・教師間の人間関係を作り、集団生活に必要な秩序や規律を教えることができない教師が近年増えていると指摘されている（学級経営研究会，2000）。子どもとのかかわりに困難さを感じる教師が多い現状を考えても、孤立しつつある子どもを早期に発見し、望ましい方向へと学級集団を導いていくためには、観察や対話で得られる情報を補完するデータが重要となる。そこで、補助資料を得るために客観的な調査を行うことが考えられる。学級集団を把握するための教育的資料を、学級担任が子どもと接することで得られる

認知と擦り合わせることで、よりの確に学級集団内の人間関係を把握することが可能となる。学級集団のソシオメトリック構造の調査が、いじめ問題の解消や人間関係の形成支援など、子どもに対してもたらす恩恵は大きい。

#### ソシオメトリーの問題点

インフォーマルな集団の対人関係からその構造を分析する方法にソシオメトリー（Moreno, 1953）がある。これは小集団という社会システムのグループプロセスを探求する手段として構築されたものであり、集団の持つ力動性をメンバー相互のある時点における受容と拒否の選択から明らかにするものである。このソシオメトリーは、集団構造を明らかにする上で有用な分析手法ではあるが、実施上の問題を抱えている。

第1の問題として、ある基準に対して選択・排斥するメンバーをそれぞれ記名させるという調査手法を採用している点が挙げられる。選択や排斥の判断は、好悪感情を基に直接相手を記名することで行われる。この行為が、特に排斥の判断において、評定者自身や相手との関係に負の影響を及ぼすことが懸念される。この問題を軽減するために、「一緒に話したい人は誰ですか」といった間接的質問を用いるのが一般的である。しかしながら、程度の差こそあれ好悪感情を根拠とする人物評価を迫っていることに変わりはない。この倫理的問題が調査の実施を難しくしている。

第2に質問項目の設定に関する問題がある。間接的質問では、例えば学級集団に実施する場合には「一緒に勉強がしたい人は誰か？」というように、その集団にとって、そして調査者が明らかにしたい集団構造にとって、意味のある基準に基づいたものを用意しなければならない。もしも実施する集団にとって適切な質問内容でなければ、そのデータは価値のないものになってしまう。また、同じ集団であっても質問が異なればデータが表す構造の意味も異なるため、それらの結果を直接比較することはできない。

第3に分析上の問題が挙げられる。ソシオメトリーでは、回答者に選択・排斥したいメンバーをそれぞれ数名ずつ挙げさせる。そのため、名前の挙がらなかったメンバーとの関係はデータとして直接反映されない。

第4に分析結果の表現方法の問題がある。メンバー間の選択・排斥関係をソシオグラムやソシオマトリックスという図表に集約するが、ソシオグラムは作図が恣意的であり、作り手の意図が介入しやすい。また、メンバーの数が多くなるほど複雑な図になってしまうという欠点がある。これに対してソシオマトリックス

は解釈的信頼度が高く、下位集団や下位集団間の結合の強さを把握することができ、個人の社会的地位や選択・排斥をどの下位集団から受け取っているかを知ることができる。また、大きなサンプルにおいてもこれらの特色が崩れないという利点をもっているが、読み取りが困難であるという大きな問題を抱えている。

#### ソシオプロフィール法

藤本(2004)は集団のソシオメトリック構造を分析する手法としてソシオプロフィール法を開発している。ソシオプロフィール法は、現在の関係性の親密さに関する相互評定データを分析することにより、集団におけるメンバーの位置を数値および視覚的図形(プロフィール)として表現する。このソシオプロフィール法は、ソシオメトリーが抱える諸問題から解放されている。

まず、ソシオプロフィール法では好き嫌いを基準とした主観的評価ではなく、現在の2人の関係が親密かどうかについて客観的な評価を求める。最低段階の評価は「無関係」であり、嫌いのようなマイナスの要素は扱っていない。あくまでも現在の2人の関係がどの程度親密な状態かを問うことによって、倫理やプライバシーに関する問題、また評定者が防衛的な回答を行うなどの問題を回避している。

つぎに、ソシオプロフィール法の質問項目は、人間関係に普遍的に存在する親密さの1項目であるため、集団の性質に関係なく、また文化・社会・年齢といった個人の違いをも超えて適用することができる。そのため、質問内容をその都度調査対象にあった具体的なものに変更しなければならないという煩雑さや、それが本当にその集団にとって適切な基準であるかなどといった問題から解放されている。

さらに、全員に対して親密度を評定する全件評定を採用しているため、集団に存在する全ての二者関係の情報から集団構造を明らかにすることができる。全件評定式は集団の人数が増えるほど評定者への負担が大きくなるという欠点はあるが、5・6人の小集団から40人程度の中規模集団であれば回答時間も数分で済む。

また、同じ項目について何度も評定することから、5件法を採用している。5件法は100分率では100・75・50・25・0と直感的に捉えることができ、程度判断が安定しやすい。そのため、7件法やそれ以上で評定を求めるよりも認知的負荷は少ない。このような間隔尺度の方が、好悪感情を基準にクラスメイトから数人を選んで順序づけるソシオメトリーの調査方法よりも、学級集団の全ての対人関係を、程度を含めて把握することができる(宮路, 1996)。ソシオプロフィール法

と同じく全件評定式を採用した間隔尺度法によるソシオメトリーも考案されているが(宮路・岸・小孫, 1994)、調査内容はソシオメトリーと同じく、好悪感情に基づく選択と排斥を扱い、さらにその理由まで明記させるなど倫理的な問題が依然として残る。

#### 本論の目的

ソシオメトリーは、以前は教育現場でさかんに用いられていたが、先述のとおり倫理的な問題や潜在的な好き嫌いを顕在化させてしまうなど、教育現場での実施において多くの問題がある。そのため、現在ソシオメトリーに基づく調査を実施することは困難な状況にある。しかしながら、この種の集団構造を明らかにする分析は、人間関係の問題が深刻な影響をもたらしている教育現場において、未だ潜在的な需要があるはずである。実際、ソシオプロフィール法について発表を行ったところ(藤本, 2003a; 2003b)、予想に反して教育・発達分野の研究者や現場の教師、カウンセラーなど他分野の方々から多くの関心が寄せられ、調査や分析の依頼も受けている。これは研究および教育現場において集団のソシオメトリック構造を把握する手法が必要とされている状況に加え、ソシオプロフィール法が簡便かつ倫理的問題の少ない手法でありながら、比較的多くの情報を直感的に認識することができるかと判断されたためと考えられる。

ただし、ソシオプロフィール法は小集団を対象に開発されたものであり、20人を超える中規模集団にそのままの手続きで適用するのは無理がある。仮に30~40人の学級集団のデータを分析し、子どもたちを2次元の集団プロフィールに布置しても、本来多次元的な学級集団の人間関係の情報は減衰されてしまう。したがって、学級集団のソシオメトリック構造を明らかにするためには、新たな分析方法を開発する必要がある。そこで、本研究はこのソシオプロフィール法を元に、学級集団を主な対象とする新たなソシオメトリック構造の分析方法の開発を行う。

### 研究1 CLASSの分析プロセスの策定

学級集団のソシオメトリック構造を分析するために、ソシオプロフィール法を基にした新たな分析方法を開発する。分析方法は、中規模集団用ソシオプロフィール法の試案(藤本, 2005)を元に、クラスタプロフィールの追加など大幅な変更を行ったものである。分析方法の名称は、学級集団を中心とした中規模集団のソシオメトリック構造を分析することから、その略語としてCLASS(Class Level Analysis of Sociometric

Structure) とした。CLASS の開発においては、中規模集団がいくつかの小集団であるクラスタに分かれやすいという性質に注目する。また、学級集団に対する調査目的を考えると、中心的なメンバーや疎外されているメンバーを早急に把握できなければならない。そこで、藤本 (2004) が分析オプションのひとつとして提案した中心メンバーと周辺メンバーを判定する方法を正式に取り入れることにした。

以下では CLASS の分析案に基づき、学級集団のソシオメトリック構造がどのように表現されるのかについて、実際のデータを用いて検証する。

#### 方法

##### 調査対象者

異なる集団サイズからなるサンプルデータを得るために、女子短大1年生20人および2年生30人を対象に、ソシオプロフィール法に基づく調査を実施した。調査時期は11月であり、十分に関係形成の進んだ状態であった。

##### 調査手続

授業時に調査冊子を封筒に入れて配布し、その場で評定させた後、再び封筒に入れた状態で回収した。座席は指定し他者から評定が見えないように配慮した。調査冊子は名簿式で、同じ講義を選択している同学年のクラスメイト全員に対して、評定者とそれぞれの対象者との“現時点での関係”の親密さについて、5件法 (5 - 親密だ、1 - 親密でない) で評定を求めた。評定後、封筒に入れた状態で冊子を回収した。

#### 結果と考察

小集団を対象としたソシオプロフィール法を元に、調査対象の集団構造について分析を行った。統計分析では SAS (version. 8) を用いた。

##### MDS による集団次元数の特定

ソシオプロフィール法では 2 次元の MDS を行うことで、集団における各メンバーの位置づけを明らかにする。集団はメンバーの人数が増えるほど、その集団内の人間関係は複雑になると想定される。この複雑さは集団を構成する次元の数に置き換えることができる。そこで、MDS の分析プロセスで得られる不適合度を参考に、集団が何次元構造なのかを特定した。具体的には、次元数を 2 次元から 10 次元まで変化させて MDS を行い、不適合度が変化しなくなった最も小さい次元を、その集団を構成する次元の数とした。ただし、結果の比較を行うために指標を絶対尺度 (level = absolute のオプションを設定) として扱った。その結果、1 年生・2 年生クラスともに 5 次元以降で不適合度に変化が見られなくなった。そこで、これらの集団は 5 次元構造として捉えるのが最適であると判断した。

##### 学級プロフィールの作成

ソシオプロフィール法では MDS の結果を図示したものを集団プロフィールと呼んでいる。CLASS でもこの集団プロフィールに当たる学級プロフィールを作成することにした。その際、視覚的な理解のしやすさなどから便宜的に MDS の 2 次元解の座標データを用いた (Figure 1, 2)。

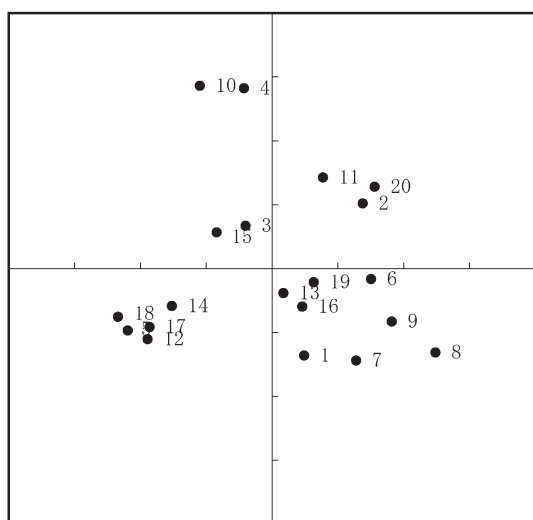


Figure 1 1年生学級プロフィール

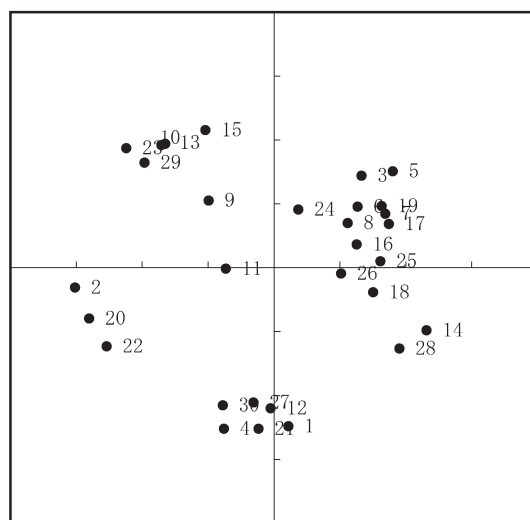


Figure 2 2年生学級プロフィール

これらはソシオプロフィール法で作成するものと同様、近接しているほど親密な関係であることを表している。集団がまとまるにしたがって、点（メンバーの位置）のばらつきが小さく、全体として中心に向かって凝集していく。また、中心に近い者は多くのメンバーと等しく良好な関係を築いており、逆に中心から離れている者は親密な関係と疎遠な関係の差が大きいということになる。中心近くに位置するメンバーほど、ソシオメトリック・ステータスを背景に、集団においてまとめ役として機能する可能性が高い。

ただし、本来多次元のデータ（短大生のデータでは共に5次元）を2次元に圧縮して表現しているため、集団構造に関する情報は減衰している。したがって、学級集団のメンバー間の関係は、クラスタ結合や個々の関係の対人距離を参考に総合的に判断する必要がある。

クラスタ分析による友人集団の特定

6人を超えると集団にクラスタが生じやすくなる。学級集団における仲間集団の例を挙げるまでもなく、中規模集団は複数の小集団クラスタにより構成されている。そこで、MDSにより得られた1年生クラスと2年生クラスの最適解である5次元の座標データを用いてクラスタ分析（ウォード法）を行うことで、短大生2クラスがどのような仲間集団から構成されているのかについて特定を行った。クラスタの分類基準は、他の調査結果（藤本，2006）などから全体のまとまりを考慮してセミパーシャル  $R^2$  がメインクラスタで0.06、その内部のさらに密接な結びつきであるサブクラスタ

で0.03とした。データ比較などを考えて、ソシオプロフィール法およびCLASSではこの2つの数値を、クラスタを識別する一貫した基準としている。

メインクラスタとサブクラスタから捉えることにより、メンバーの人間関係の詳細な結びつきを把握することができる。このクラスタの数が少ないほど、その集団は1つにまとまっていると判断することができる。中にはどのクラスタにも属していないメンバーもいるが、その場合は集団内で“孤立”しているということになる。

分析の結果、1年生クラスは7クラスタから、2年生クラスは6クラスタから構成されていた。集団の人数が多いほどクラスタの数は多くなる傾向にあるが、1年生クラスは2年生クラスよりも人数が少ないにも関わらず、クラスタ数が多かったことから、1年生クラスは仲間集団がより細分化していることが分かる。

クラスタプロフィールの作成

クラスタ単位で学級集団の構造を把握するために、学級内の仲間集団が互いにどのような関係にあるのかを表すクラスタプロフィールを作成した（Figure 3, 4）。

藤本（2005）は、当初は狩野（1980）と同じ発想から、クラスタ分析の結果を元にソシオプロフィールに布置したメンバーを円で囲む案を考えていた。しかしながら、同一クラスタに属するメンバーが必ずしも2次元平面上で近接しているわけではない。そのため10人以上の集団になると囲みが入り組み、逆にクラスタやクラスタ間の位置関係がつかめなくなってしまうと

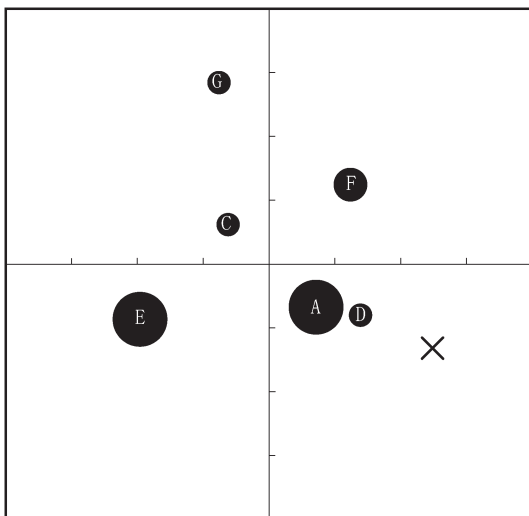


Figure 3 1年生クラスプロフィール

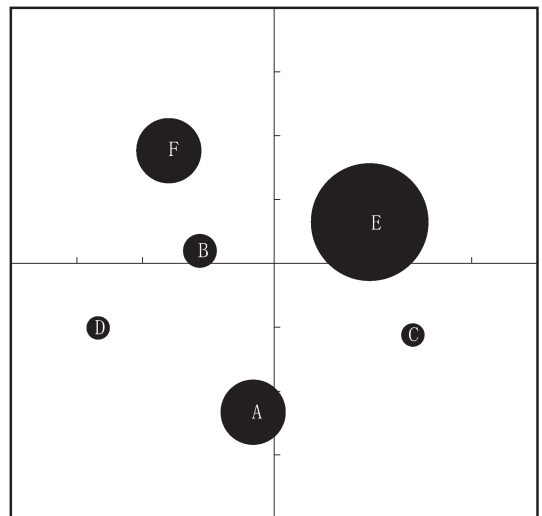


Figure 4 2年生クラスプロフィール

という問題があった。そこで CLASS では、多元性を反映したクラスタ分析の結果と位置関係を把握しやすい 2 次元表現の長所をかね合わせるために、同一クラスタに属するメンバーの 2 次元座標の平均値をそのクラスタの座標とし、クラスタメンバーの人数をドットの大きさに表現する手法を採用した。これにより各クラスタの位置関係と集団サイズを視覚化することができる。

クラスタプロフィールでは、マークの大きさがクラスタのサイズ（人数）を表し、×マークがどのクラスタにも属していない孤立メンバーを表す。また、学級プロフィールと同様に、近接しているクラスタほど良好な関係にあり、中心に近いクラスタほど、親密さの面でクラスを中心に位置していることになる。クラスタプロフィールを見て、サイズの大きいクラスタが中心寄りに位置している場合、それが学級集団の中核になっている可能性があり、逆に中心をはさんだ対極に大きめのクラスタ 2 つが存在するような場合、学級集団が二極化している恐れがある。

学級集団における所属クラスタの位置づけによって、そのメンバーの友人関係に対する認知に違いが見られるなど（楠見，1988）、クラスタが学級集団内の人間関係に及ぼす影響は大きい。グループダイナミクスの見地からも、中規模集団である学級集団はクラスタ単位で管理していくのが合理的である。その際に、学級集団における各仲間集団の位置や関係性を把握することができるクラスタプロフィールは有用な資料となりうる。

クラスタプロフィールの作成から派生するステップとして、特に気になるクラスタがある場合には、個々のクラスタの構造について検討することも考えられる。その場合、クラスタは多くの場合 10 人未満の小集団であるため、クラスタに属するメンバーだけの相互評定データを用い、小集団に対するソシオプロフィール法（藤本，2004）と同一の手続きにより分析を行えばよい。ただし、4 人以下のクラスタや相互に緊密なクラスタ（相互評定が 4 や 5 ばかり）は各メンバーの座標が集中するため、分析をしてもあまり意味がない。

#### 学級インデックスの作成

ソシオプロフィール法では、分析によって得られる周辺度や集団離散度、さらにコミュニケーション・スキルや集団満足感など、同時に調査した関連指標を合わせて、集団の通信簿にあたる集団インデックスとしてまとめる。そこで、CLASS でもこれに対応する学級インデックスを作成することにした。

#### 周辺度と集団離散度

MDS の最適解における各メンバーの座標と原点との距離である周辺度（非中心性）、および周辺度の集団平均である集団離散度（集団非凝集性）と標準偏差である親疎分化度をデータとして用いた。学級インデックス（Table 1, 2）を見ると、集団離散度については 1 年生クラスが 3.59、2 年生クラスが 4.30 と差が見られた。小集団は初期の 1 ヶ月に大きく凝集し、その後安定するが（初期凝集現象；藤本，2004）、学級集団でも調査時期である 11 月では安定した凝集状態になっていると考えられる。そのような状況の中で 2 つのクラスが異なる集団離散度を示した理由として、集団サイズの違いが考えられる。小集団であれば全てのメンバーと相互作用を行う必要があるが、中規模集団である学級集団になるとクラスタに分かれ、その中での相互作用が中心となる。他のクラスタのメンバーとの相互作用は必ずしも必要ではなく、ほとんど交渉のないメンバーもいる。その傾向は当然 20 人よりも 30 人の集団の方が強くなると考えられる。実際、7 人集団の凝集性を縦断的に調べた研究では、7 月上旬の段階で 2.06 と低く、それは学年末に行った追跡調査でも変わっていなかった（藤本，2004）。集団サイズと集団離散度の安定水準の関係については今後更なる検討が必要

Table 1 1 年生学級インデックス

番号	クラスタ	周辺	集団内立場
1	A	a	2.84
2	F	a	3.36
3	C	a	3.43
4	G	a	5.52 周 辺
5	E	a	4.55
6	D	a	2.51
7	D	a	2.95
8	B	*	4.99 周 辺
9	A	a	3.67
10	G	a	5.82 周 辺
11	F	a	3.41
12	E	a	4.11
13	A	a	1.18 核
14	E	a	3.29
15	C	a	3.20
16	A	a	2.38 中 心
17	E	a	3.92
18	E	a	4.63
19	A	a	2.02 中 心
20	F	a	4.00
集団離散度			3.59
親疎分化度			1.16

Table 2 2年生学級インデックス

番号	クラス	周辺	集団内立場
1	A	a	4.97
2	B	a	6.14
3	E	a	3.99
4	A	a	5.25
5	E	a	4.47
6	E	a	3.09
7	E	a	3.63
8	E	a	2.79
9	F	a	3.12
10	F	a	5.13
11	B	b	3.29
12	A	a	4.48
13	F	a	5.07
14	C	a	4.77
15	F	a	4.85
16	E	b	2.64
17	E	a	3.65
18	E	b	3.14
19	E	a	3.72
20	D	a	5.91
21	A	a	5.04
22	D	a	5.90
23	F	a	5.68
24	B	b	3.36
25	E	b	3.65
26	E	b	2.16
27	A	a	4.47
28	C	a	4.54
29	F	a	5.25
30	A	a	4.90
			集団離散度 4.30
			親疎分化度 1.07

ではあるが、得られたデータから判断して正比例の関係であると考えてよいだろう。

ただし、集団離散度を異なる集団間で比較することを考えると、偏差平方和から分散を算出するように、集団離散度を人数で除すなどの手続きが必要になるかもしれない。ちなみに人数で除すと、1年生クラスで0.18、2年生クラスで0.14となり、クラス数との結果と対応することになる。ただし、この方法では上記の7人集団は0.29と高い数値になってしまう。そこで人数を平方根変換した値で除してみると、1年生クラスは0.80、2年生クラスは0.79、7人集団は0.78となり、ほぼ同じ水準であった。人数で調整した集団離散度については、採用の有無を含めて今後の検討課題とした。

### 学級内立場

クラスの中心的存在や逆に疎外されているメンバーを特定するために、藤本(2004)の案を採用した。各メンバーの周辺度、集団離散度、そして親疎分化度(SD)を指標に、各メンバーの学級集団内での立場を5段階で判定した。まず、周辺度が集団離散度から-1SD未満で-2SD以上のメンバーを“中心”とした。中心メンバーは、集団の多くのメンバーと満遍なく良好な関係を形成している人気者ということになる。さらに-2SD未満のメンバーをクラスの“核”とした。このようなメンバーはより中心的存在で、ソシオメトリック・ステータスを背景に、集団への影響力も高いと考えられる。一方、周辺度が集団離散度から+1SDより高く+2SD以下のメンバーを“周辺”とした。このようなメンバーは集団に馴染みきれておらず特定のメンバーと閉鎖的關係を形成している可能性がある。さらに、+2SDより高いメンバーを“逸脱”とした。逸脱と判定されたメンバーは周辺の傾向が著しく、集団から疎外されていることが疑われる。学級内立場において逸脱判定を受けているメンバーや、クラス結合において孤立しているメンバーには注意が必要である。特に逸脱と孤立の両方を兼ねている場合は、いじめなど人間関係の問題を抱えている恐れがある。

調査を行った短大生2クラスは、クラスプロフィールから(Figure 3)、1年生クラスにおいてどのクラスにも属していない孤立メンバーがいることが分かった。彼女は学級内立場でも周辺という判定を受けている(Table 1)。逸脱判定ではなく、またクラスAと比較的近いため、明らかにクラスから疎外されているわけではないかもしれない。しかしながら、1年生クラスの8番の学生が人間関係において何らかの問題を抱えていることは十分考えられる。人間関係の問題が欠席の増加や休学・退学、また学業成績の低下などを引き起こす原因となりうることを考えると、早急に何らかの対処を施すべきである。

### 個人プロフィール

そこで追加的に8番の学生の個人プロフィールを作成し検討した(Figure 5)。個人プロフィールはソシオプロフィール法と同じく、対象者を原点に置き、対象者とのメンバーとの距離と評価のズレを表したものである(藤本, 2004)。個人プロフィールは、原点に近いメンバーほど対象者と親密な関係にあることを意味する。また、評定格差を表すx軸においてプラスに布置されたメンバーに対しては、対象者が思っ

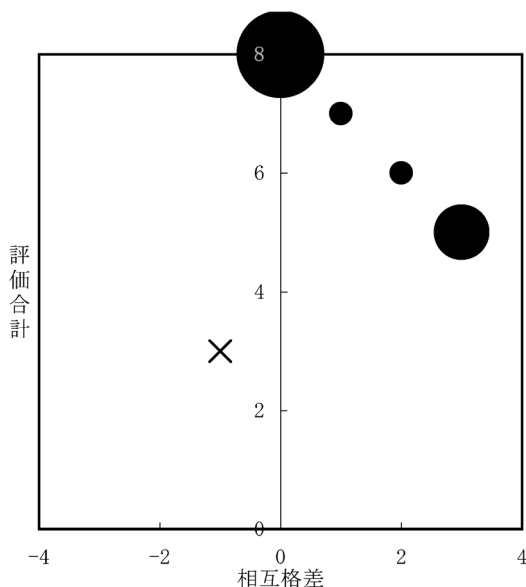


Figure 5 1年生8番の個人プロフィール

いるよりも相手が2人の関係を親密であると評定していることになり、逆にマイナスだと対象者が思っているほどには相手は親密であるとは評定していないということになる。

個人プロフィールを見ると、8番の学生は他のメンバーとの関係性の親密さを低く見積もっていることが分かる。しかしながら、クラスメイトの中には彼女との関係をある程度親密であると評定しているメンバーも存在している。彼女をこれらのメンバーの仲間集団に属させることで、彼女にクラス内でのソシオメトリック・ステータスの基盤を持たせるなどの措置が必要である。

## 研究2 関係性の親密さの評定基準の妥当性

人間関係には多様な要因が影響しているにも関わらず、関係性の親密さを1項目で直接的に聞くやり方では、これらの要因の影響を考慮できていないのではないかという指摘が想定される。この疑問に対しては、関係性の認知はそういった外部変数の影響などを加味した総合評価であると考えている。すなわち、それら外部要因の影響を直接データとして扱ってはいないが、評定者は関係性の親密さを評価するときに、関連要因を踏まえて総合的に判断しているということである。

また、親密度を聞くことは好き嫌いを聞いているのと同じではないかという指摘も想定される。好き嫌い

という相手への主観的評価を聞くことは、倫理的な問題に加えて、その問い自体が好悪感情を顕在化させ、今後の関係を規定する恐れがある。ソシオプロフィール法およびCLASSでは、2人の現在の関係性を客観的に評価させる。好意と嫌悪は個人の感情であるが、親密さは両者の関係の状態である。好意と親密さは、相手への好意という“志向性”により親密な関係という“状態”が生起するという関係にあり、概念的に異なる。また、ソシオプロフィール法およびCLASSは、センチメント構造ではなく、現在の関係性の親密さを元にした調査時点でのソシオメトリック構造を明らかにすることを目的としている。したがって、好悪感情から導き出される従来のソシオメトリーとは、扱っている対象やテストで得られる構造がそもそも異なるのである。

以上、関係性の親密さを1項目で聞くという方法自体には、大きな問題はないと考えている。しかしながら、多様な要因を勘案して判断される関係性の親密さが、どのような基準により評定されているのかについては、未だ具体的に検討されていない。

友人選択の理由として“近接性”・“功利性”・“優越性”・“類同性”・“情意特性”・“全体印象性”が挙げられているが、発達に伴い性格や態度の類似性、対象者の人格や能力への尊敬といった内面的な理由の比重が高くなることが知られている（上田，1969）。また、宮地（1996）は、選択理由として河井（1985）が挙げた74種類を、25カテゴリーにまとめている。これらの項目を内容から整理すると、性格や能力などの“人物評価”が大半で、他に“依存心・信頼感”・“相互作用”・“既存関係”・“関係願望”・“好意”に分けることができる。ソシオメトリーは本来回答者の願望を扱っているが（Moreno, 1953）、関係願望や好意といったテストが照準する基準以外にも、多様な評定基準から選択・非選択相手を判断していることが伺える。

選択基準と選択形式について、塩田（1964）は学校事態に良く用いられる調査基準を、好悪や仲のよさを問う一般基準、組替えや席替えを問う具体的基準、具体的な作業のパートナーを問う特殊の基準の3カテゴリーに分類している。そのうち一般基準と具体的基準には大差がなく、特殊の基準が他と区別されること、また一般基準のひとつである好きな友達という基準が多義的であることを指摘している。ソシオプロフィール法およびCLASSが用いる関係性の親密さに対する質問は、これらのカテゴリーのうち、一般基準でも唯一現実を尋ねる「いま現に仲良くしている友達は誰で



すか」という基準に相当する。

以下では、これらの関連諸研究により得られた知見を踏まえながら、関係性の親密さがどのような基準で捉えられているのかについて検証を行う。

## 方法

### 調査対象者

中学校2校の1年生4クラス(男子75名,女子68名)と3年生5クラス(男子85名,女子78名)のうち,欠席者15人を除く292人を対象に,9月中旬にアンケート調査を実施した。そのうち全段階に無効な回答をした2人を分析から除外した。回答者はすでに4月から5回,CLASS調査に参加していた。

### 調査手続

別途行ったCLASS調査の後,学級担任が一斉にアンケート用紙を配布し,関係性の親密さの評価段階(“5-親密だ”から“1-親密でない”までの5段階)について,それぞれどのような基準で評定しているのかについて,自由記述により回答を求めた。

## 結果と考察

### 評価基準のコーディング

複数回答をしている場合は回答ごと,また回答が複数の意味を含む場合は意味ごとに分割した。こうして得られた有効回答2315を,執筆者が総覧し33カテゴリーを抽出した。

つぎに研究協力者が,このカテゴリーを用いて各回答を分類し,さらに各回答のポジティブさの程度(P値)について+3から-3までの7段階(+3:とてもポジティブ,+2:ポジティブ,+1:ややポジティブ,0:ニュートラル,-1:ややネガティブ,-2:ネガティブ,-3:とてもネガティブ)で評定した。例えば「とても仲の良い友人」は“仲のよさ+3”,「あまり話さない」は“会話頻度-1”となる。また,「ふつう」という回答は他段階の回答を見てカテゴリーを判断しP値を0とした。

1次コーディング後,研究協力者の意見を参考にカテゴリーの見直しを行った。その結果整理された新しい16カテゴリーを用いて,再度同じ研究協力者がコーディングとP値評定を行った。そして,執筆者によるチェックと研究協力者の修正を3度繰り返した後,各回答のコーディングおよびP値を確定した。

### カテゴリーの出現率

はじめに,二者間の関係性がどのような基準で判断されているのかについて明らかにするために,段階を無視して,カテゴリーの出現率を算出した(Table 3)。その結果,“会話”が38.57%と圧倒的に多く,逆に

Table 3 カテゴリーごとの各種データ

	出現率	P比	N比	親密度WT
直接カテゴリー				
仲の良さ	6.31	.80	.20	9.31
関わり	8.12	.23	.77	6.63
信頼	5.79	.93	.07	11.41
気が合う	5.57	.33	.67	8.95
同級経験	1.17	.81	.19	5.82
同部活	0.69	1.00	.00	10.06
相互作用カテゴリー				
会話	38.57	.60	.40	8.23
遊び	5.49	.80	.20	10.22
一緒	5.31	.89	.11	12.49
通信	1.17	.93	.07	8.12
声掛け	1.12	.62	.38	7.94
挨拶	4.84	.88	.12	4.82
話しやすさ	5.62	.79	.21	7.80
楽しさ	6.35	.92	.08	8.91
不適切カテゴリー				
人物評価	2.55	.31	.69	9.75
好悪感情	1.34	.30	.70	8.11
全体平均	7.24	.66	.34	8.64

“通信”・“声掛け”・“同級経験”・“部活動”・“人物評価”・“好悪感情”は1%程度に止まった。他のカテゴリーは概ね5%前後で,“関わり”のみ8%であった。

CLASSにおける調査は,自他の関係性が現時点でどの程度親密かについて5段階評価を求める。したがって,ソシオメトリーのような好悪感情や願望は基準として不適である。調査の結果,“好悪感情”や“人物評価”の出現率は全体の3.89%に過ぎなかった。一方,関係性の親密さを直接評価基準とする“仲の良さ”や“関わり”が14.43%,その中で醸成される“信頼”・“気が合う”が11.36%と,関係性に由来する基準が全体の約25%を占めていた。残るカテゴリーは親密さの現れである相互作用に関するもので,“相互作用頻度”が56.50%,その際に喚起される“話しやすさ”や“楽しさ”が11.97%と,相互作用から関係性を推測するという回答が70%近い比率を占めていた。以上から,関係性の親密さは直接,または日常の相互作用から判断されることが明らかとなった。

### カテゴリーのP/N比

カテゴリーのポジティブ回答とネガティブ回答の出現頻度を調べるために,P値+3~+1をポジティブ回答,-1~-3をネガティブ回答として,その出現比を算出した(Table 3)。その結果,全回答のP/N比は66:34であった。つぎにカテゴリー別に見ると,

N 比の高いカテゴリーは“関わり”・“気が合う”・“人物評価”・“好悪感情”の4つのみで、ほとんどのカテゴリーで P 比の方が高かった。以上から、親密さに関する肯定的な評価は、否定的な評価よりも、多様な基準で判断されることが分かる。これは普段の相互作用で得られる情報量の違いによるものと考えられる。また、出現率の高い“会話”は、P/N 比の差も比較的小さく、関係性の親密さを判断する上で用いられやすい基準であることが分かる。

#### カテゴリーの親密度ウェイト

カテゴリー自体に親密さの程度情報が含まれている可能性がある。そこで、まずカテゴリーごとに、評価段階(5)×P 値が正の回答(3)の各セルの出現数を、そのカテゴリーの全ポジティブ回答数でそれぞれ除すことで、ポジティブ回答出現率を求めた(カテゴリー間出現数差の統制)。つぎに各セルのポジティブ回答出現率に、対応する段階数(5~1; 親密さの重み付け)と P 値(3~1; ポジティブ度の重み付け)を乗じ、カテゴリーごとにセルの値を合計した。この手続きにより得られる親密度ウェイト(Table 3)は、高段階の基準に高程度のポジティブ回答をしたときに高くなる。この指標により、どのカテゴリーが親密さを高く評定する際に用いられるのかを知ることができる。

比較の結果、関係性関連では“仲の良さ”・“同部活”・“信頼”・“気が合う”, 相互作用関連では“遊び”・“一緒”・“楽しい”が、高段階の関係を判断する際の基準として用いられることが分かった。一方、言語的相互作用関連の“会話”・“通信”・“声掛け”・“話しやすさ”は、高段階の関係に特有のカテゴリーというわけではなかった。さらに、“同級経験”といった関係性や“挨拶”程度の相互作用は、低段階の関係性に由来する基準であった。以上、カテゴリー自体に親密度情報が含まれていることが確認された。

#### 評価段階の親密度

16カテゴリーの出現率、P/N 比、親密度ウェイトについて検討したが、関係性の親密さの評価段階についても検討を行った。ただし、たとえば、P 値+3の“毎日挨拶をする”と、程度+1の“たまに遊びに行く”では、後者の方が二者は親密である。そこで、カテゴリーの親密度ウェイトについて考慮した。まず評価段階ごとに、カテゴリー(16)×各 P 値の回答(7)の各セルの出現数を、その評価段階の全回答数で除すことで回答出現比率を求めた(段階間出現数差の統制)。つぎに各セルの回答出現比率に、P 値が+3のセルには7、+2のセルには6、+1のセルには5、0のセル

には4、-1のセルには3、-2のセルには2、-3のセルには1をそれぞれ乗じた(程度の重み付け)。さらに対応するカテゴリーの親密度ウェイトを乗じ(カテゴリーの親密さ情報の重み付け)、最後に評価段階ごとにセルの値を合計することで、各評価段階の親密度加重得点を求めた。その結果、段階5が63.35、段階4が50.35、段階3が39.66、段階2が27.01、段階1が15.03となり、各段階は約12差と、評価段階が等間隔であることが確認された。

以上、関係性の親密さについて回答する際に用いられる基準は、ソシオプロフィール法および CLASS の目的にとって妥当であることが明らかとなった。

### 研究3 CLASS を用いた継時的調査

Newcomb (1961) による学生の相互魅力に関する縦断的なソシオメトリック研究などに代表されるように、対人関係を扱う領域において、継時的調査は重要な知見を与えてくれる。そこで、CLASS の実用性を検証するために、中学1年生の学級集団を対象に年度を通して縦断的に調査を行い、ソシオメトリック構造の変動について分析を行う。

#### 方法

##### 調査対象者

中学校1年生4クラス149人(途中2人転出)を対象に、5月末・6月末・9月初・10月初・12月初と、夏休みを挟み約1ヶ月間隔で計5回調査を行った。

##### 調査手順

調査は、学級担任が調査冊子を一齐配布し、その場で生徒に回答を求める形で行われた。調査冊子は評定者と各クラスメイトとの“現時点”での関係性の親密さについて、5件法(5-親密だ、1-親密でない)で評定させる調査紙と、“学級の雰囲気”・“級友との関係”・“学習意欲”に関する単一項目について、7件法(7-とてもそう思う、1-全くそう思わない)で評定させるスクール・モラル調査紙により構成した。

##### 結果と考察

関係性の親密さに対する評定結果を CLASS の手続きで分析し、各クラスの学級プロフィール、クラスプロフィール、学級インデックスを作成した。

##### 学級構造とスクール・モラルの変動

集団離散度の推移を見ると、夏休みを挟んで上昇した以外は徐々に減少していき、第5回の時点で最低値を示した(Table 4)。ただし、集団離散度は調査を通して大きく変化したわけではなかった。これは、第1回目の調査が5月末であることから、4クラスとも

Table 4 集団凝集性と親疎分化度の推移

周辺度		第1回	第2回	第3回	第4回	第5回
1組	M	3.78	3.72	3.65	3.31	3.22
	SD	1.09	1.15	1.12	1.01	0.99
2組	M	3.51	2.94	2.68	2.62	2.69
	SD	1.01	1.01	0.80	0.88	0.94
3組	M	3.67	3.38	3.68	3.32	3.23
	SD	0.88	0.87	0.85	1.01	0.95
4組	M	3.59	3.23	3.53	3.12	3.05
	SD	0.62	0.69	0.65	0.88	0.89
学年	M	3.64	3.32	3.39	3.09	3.05
	SD	0.91	0.98	0.96	0.98	0.96

note. Mは集団凝集度, SDは親疎分化度を表す。

すでに初期凝集期が終わり、集団全体の凝集性は安定しながらもソシオメトリック構造がダイナミックに変化していく親疎分化期へ移行していたためと考えられる。学年初めは学級担任にとって特に忙しい時期ではあるが、学級運営の教育的資料とするならば、学級集団の初期状態を知るためにも、かなり早い時期から調査を始めることが望ましい。

スクール・モラルの推移についても、スクール・モラル平均が調査を重ねるごとに上昇し、第5回で最高値を示した (Table 5)。集団離散度とスクール・モラルは強い負の相関関係を示したことから ( $r = -.82$ )、凝集した学級集団ほど、所属するメンバーの学級への評価や学習意欲が高いことが分かる。

クラス別では、2組においてのみ、スクール・モラルに関する指標で特異な変動が見られた。具体的には、第3回まではスクール・モラルや集団離散度が他のクラスとほぼ同様の変動を示したが、2学期以降で集団離散度が安定したのに対して、スクール・モラルのうち学級雰囲気と級友との関係が低下した (Table 5)。学習意欲は大きな変化がないことから、このクラスに学級集団レベルで人間関係に関する何らかの問題が生じていたことが伺える。

親疎分化度については、第1回調査の時点ではクラスによって大きな差が見られたものの、最終的にほぼ同じ値に収束している (Table 4)。この結果は、学級集団は特有の親疎分化の変動を示しながらも、学年末に近づくにつれてどのクラスも一定の水準に落ち着くということを示唆している。

また2組については、第5回では回復したものの、集団離散度とスクール・モラルが乖離した2学期に、親疎分化度が大きく低下している。これは、田中 (1970) が主張する学級集団の構造の統合化を意味し

Table 5 スクール・モラルの推移

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回
学級雰囲気					
1組	4.73	5.46	5.35	5.03	5.42
2組	4.51	4.57	4.81	4.59	4.17
3組	5.35	5.05	5.41	5.65	5.65
4組	5.16	5.79	5.61	5.63	5.66
学年	4.94	5.22	5.29	5.23	5.22
級友関係					
1組	4.81	5.19	5.19	5.11	5.36
2組	4.43	4.81	4.73	4.78	4.44
3組	5.30	5.35	5.27	5.24	5.49
4組	5.21	5.29	5.34	5.45	5.61
学年	4.94	5.16	5.13	5.15	5.22
学習意欲					
1組	4.68	4.92	4.86	4.75	4.97
2組	3.70	4.03	4.05	3.84	4.03
3組	4.65	4.92	4.49	4.95	4.76
4組	4.63	5.00	4.79	4.74	5.26
学年	4.41	4.72	4.55	4.57	4.75
スクール・モラル平均					
1組	4.74	5.19	5.14	4.96	5.25
2組	4.22	4.47	4.53	4.41	4.21
3組	5.10	5.11	5.05	5.28	5.30
4組	5.00	5.36	5.25	5.27	5.51
学年	4.76	5.03	4.99	4.98	5.07

ている。学級集団内の人間関係の平均化はスクール・モラルの向上をもたらすはずであるが (Schmuck, 1971; 楠見, 1986)、2組の学級雰囲気はむしろ悪化している。2組に生じた問題を探るためには、クラスの個々のメンバーに目を向けなければならない。

#### 2組に関する個別検討

個人レベルの検討をするために、2組のメンバーのスクール・モラルと学級内立場の変動に注目した (Table 6)。その結果、第4回・第5回でスクール・モラルが低下したのは、男子6人と女子2人であった。所属クラスを見ると、男子6人のうち4人が同一のマジョリティ・クラスに属しており、いずれもクラスの中心的存在であった。残る男子2人は第4回以降クラスAから離脱しているものの、女子2人も含めて周辺や逸脱の判定は受けていない。以上から、2組の特異な変動パターンは個人の排斥であるいじめなどではなく、中心グループのクラスに対する不満が主な原因ではないかと推測される。関係性の“現状”を測定するCLASSの結果と、クラス全体に対する“認知的な評価”を測定するスクール・モラルの結果の乖離は、クラスの将来的な関係性の悪化を示唆し

Table 6 2 スクール・モラルの推移

番号	クラス					スクール・モラル平均					集団内立場				
	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回
4	A a	A a	A *	A a	A a	5.33	6.67	5.67	5.33	3.00			中心	中心	中心
5	A a	A a	A *	B c	C a	6.33	6.33	5.33	4.00	4.00	核	中心			
6	D *	A a	A *	A a	A a	3.33	2.00	4.33	1.00	1.00			中心	中心	
9	D *	A a	A *	A a	A a	4.33	4.67	5.33	4.00	4.67		中心			
11	A a	A a	A *	D a	B *	5.00	5.33	6.00	4.00	4.00					
19	D *	A a	A *	A a	A a	5.00	6.67	7.00	5.67	5.67	中心	中心	中心	中心	
31	F b	B b	F b	F *	G a	4.00	4.33	5.00	5.67	4.00					
35	F b	G *	F a	C *	H *	3.00	2.33	4.00	2.67	2.33					

ている。

### 総合考察

学校教育現場での使用を想定し、学級集団のソシオメトリック構造を解析する分析ツールである CLASS の開発を行った。CLASS 調査では、自分と他のメンバーの二者関係について、現時点での親密さに関する評定を求める。この関係性の親密さは、倫理性に関する好悪感情や、現状を問う上で問題となる関係願望ではなく、直接的に、または日常の相互作用を基準に判断されることが明らかとなった。また、評価段階についても、評定基準のカテゴリーが持つ親密さの程度情報を考慮することにより、等間隔性が確認されている。

調査により得られた関係性の親密さに関する評定結果を、CLASS の手続きに基づいて分析することにより、“個人プロフィール”・“学級プロフィール”・“クラスプロフィール”・“学級インデックス”が作成される。個人プロフィールや学級プロフィール、クラスプロフィールは、メンバーやクラスを2次元に布置するものであり、視覚的に集団構造を把握することができる。一方、学級インデックスは、具体的なデータをまとめたものであり、個人指標としての周辺度と学級内立場が、集団指標としての集団離散度や親疎分化度・各個人指標の集団平均からなる。集団離散度は、学級集団がどれだけ凝集した状態にあるのかを判断する指標である。凝集性はメンバーを集団にひきつける力となるため、集団離散度が低いほどメンバーの学級集団への帰属意識が高く、集団行動も円滑に行われる。したがって、集団離散度は学級インデックスの中でも重要な指標である。また、個人の周辺度はクラスを中心からどれだけ距離を置いているかをあらわしており、低いほどクラスへの関わりも高いということになる。さらに、これら周辺度の平均値である集団離散度と標準偏差である親疎分化度を基準として個人の周辺度を

判断することにより、そのメンバーが中心的な存在（核や中心）か、周辺的な存在（周辺や逸脱）かを知ることができる。これら以外にも各種プロフィールや諸指標を見ることで、学級集団のソシオメトリック構造を多面的に理解することができる。

CLASS は集団づくりを中心とした学級運営に教育的資料を提供する有用なツールである。ただし、研究2において、2組の特徴的な変動パターンを中心グループの不満分子化と推定したように、各種プロフィールに加え、学級集団の凝集性を表す集団離散度や各メンバーの学級集団における立場といったデータ、関係性の親密さと併せて調査した関連諸指標など、CLASS が提供する多様な資料を総合して、ソシオメトリック構造をはじめとする学級集団の現状を把握しなければならない。また、学級内立場や個人プロフィールによって、学級集団内の人間関係に問題を抱えている子どもを早急に検出することも忘れてはならない。CLASS はあくまでも資料を提供するツールであり、得られた情報をどのように有効活用するかは、分析者にかかっている。

### 引用文献

- 蘭 千壽 (1981). 学級集団におけるソシオメトリック選択, 行動特性, 集団凝集性の変容に及ぼす役割行動の効果. *教育心理学研究*, 29, 51-55.
- Bonney, M.E. (1943). Personality traits of socially successful and unsuccessful children. *Journal of Educational Psychology*, 34, 449-472.
- Coie, J.D., Dodge, K.A., & Coppotelli, H. (1982). Dimensions and types of social status: A cross-age perspective. *Developmental Psychology*, 18, 557-570.
- 藤本 学 (2004). ソシオプロフィール法: 関係性の親密さから見る小集団の構造 対人社会心理学研究,

- 4, 77-85.
- 藤本 学 (2005). ソシオプロフィール法の中規模集団への適用にむけて: 学級集団のソシオメトリック構造を特定するために 日本教育心理学会第47回総会発表論文集, 585.
- 藤本 学 (2006). 中規模集団用ソシオプロフィール法による学級集団のソシオメトリック構造の変動に関する検討 日本教育心理学会第48回総会発表論文集, 26.
- 藤本 学・大坊郁夫 (2003 a). 小集団のソシオメトリック・ステータスに関する分析手法 日本心理学会第67回大会発表論文集, 211.
- 藤本 学・大坊郁夫 (2003 b). 同輩集団の関係形成プロセスに関する時系列的研究 日本社会心理学会第44回大会発表論文集, 782-783.
- 学級経営研究会 (2000). 学級経営をめぐる問題の現状とその対応 - 関係者間の信頼と連携による魅力ある学級づくり - . 学級経営の充実に関する調査研究. 文部省委嘱研究 (平成10・11年度).
- Karweit, N. & Hansell, S. (1983). School organization and friendship selection. in Epstein, J. and Karweit, N. (Eds.) *Friends in school. Patterns of selection and influence in secondary schools*. NY: Academic Press, 29-38.
- 河井芳文 (1985) 『ソシオメトリ - 入門 - 学級の子どもたちを理解するために -』みずうみ書房
- Kuhlen, R.G. & Lee, B.J. (1943). Personalistic and socially acceptability in adolescence. *Journal of Educational Psychology*, 34, 321-340.
- 狩野素朗 (1980). 集団の大局的構造特性とソシオメトリック・コンデンスエイション 九州大学教育学部紀要, 24, 13-23.
- 楠見幸子 (1986). 学級集団の大局的構造の変動と教師の指導行動, 学級雰囲気, 学校モラルに関する研究. 教育心理学研究, 34, 104-110.
- 楠見幸子 (1988). 学級集団のサブグループ・タイプと児童の友人関係特性に関する研究. 実験社会心理学研究, 27, 157-162.
- 前田健一 (1995). 児童期の仲間関係と孤独感: 攻撃性, 引っ込み思案および社会的コンピタンスに関する仲間知覚と自己知覚. 教育心理学研究, 46, 156-166.
- 前田健一・片岡美菜子 (1993). 幼児の社会的地位と社会的行動特徴に関する仲間・実習生・教師アセスメント. 教育心理学研究, 41, 152-160.
- 松山安雄・倉智佐一 (1969). 学級におけるスクール・モラルに関する研究 (第1報). 大阪教育大学紀要第 部門, 18, 19-36.
- 宮地 功 (1996). 間隔尺度法と列挙法による友達調べの選好関係の関連性. 教育情報研究, 11, 21-32.
- 宮地 功・岸 誠一・小孫康平 (1994). 間隔尺度測定に基づいたソシオメトリックテストの提案と分析システムの開発. 教育情報研究, 9, 33-44.
- Moreno, J.L. (1953). *Who shall survive? A new approach to the problem of human interrelations*. NY: Beacon House.
- Muldoon, J.F. (1955). The concentration of liked and disliked members in groups and the relationship of the concentrations to group cohesiveness. *Sociometry*, 18, 73-81.
- 長島貞夫・中野佐三・田中熊次郎・斉藤定良・中村陽吉 (1955). 行動特性の変容条件としての社会的役割. 日本心理学会第19回大会発表論文集, 125.
- 長島貞夫 (1956). 児童社会心理学 - 性格の社会的形成 - . 牧書店.
- Newcomb, T.M. (1961). *The acquaintance process*. NY: Holt, Rinehart & Winston.
- 小川一夫 (1956). 学級の社会構造に対する教師の態度に関する研究: 第二報告. 教育心理学研究, 4, 46-54.
- Schmuck, R.K. (1971). Influence of the peer group. In G. Lesser (Ed.), *Psychology and educational practice*. III. NY: Scott, Foresman, & Company.
- 塩田芳久 (1964). 学級集団の研究 (I): ソシオメトリック・テストの選択基準と選択形式. 名古屋大学教育学部紀要 教育心理学科, 11, 183-192.
- 瀧野揚三 (1997). 学級における人間関係 関 嶋一・松浦 宏・古市裕一・中西信夫 (編) 教育心理学の理論と実践 日本文化科学社, 137-158.
- 田中熊次郎 (1970). ソシオメトリー入門 - 集団研究の一つの手引. 明治図書.
- 田崎敏昭 (1982). 学級集団における勢力地位と勢力資源. 心理学研究, 53, 165-168.
- Young, L.L. & Cooper, D.H. (1944). Some factors associated with popularity. *Journal of Educational Psychology*, 35, 513-535.

## CLASS : Class level analysis of sociometric structure

MANABU FUJIMOTO (*Kurume University*)

### Summary

It benefits teachers and students to understand the sociometric structure of a classroom group. Sociometry is a method of clarifying the sociometric structure of a group. However, it is difficult to use Sociometry to identify the interpersonal relationships of a classroom group in the field of education for ethical reasons. Therefore, it is necessary to develop a new analysis method applicable in replace of Sociometry. In study 1, a new analysis method “CLASS” to illustrate sociometric structures of classroom groups was developed. In study 2, the evaluation criterion in intimacy of relationships was verified. In study 3, as an example of analysis by using CLASS, changes in the sociometric structure in the first-year classes of a junior high school were investigated. The present study confirmed that CLASS is a useful analysis method.

**Key words:** classroom group, sociometric structure, peer group, intimacy of relationship